

☒ 話すこと ☒ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用☒ 家庭学習での活用実践の
ポイント

AIを活用した個に応じた学びと教師の指導を組み合わせた「言語活動の質」の向上

実証概要

<校数> 3校(高等学校:3校)
<学年> 高等学校:第1、2学年

<人数> 1,080名(高等学校:1,080名)
<アプリ等> GELP(株式会社ベネッセコーポレーション)
Weblio Study(GRASグループ株式会社)

<AI機能について>

- 一人ひとりの生徒の興味・関心にあった学習教材の提供
- 4技能向上のための教材提供
- 発音の添削、助言
- 英作文の添削(主に文法レベル)
- 様々なテーマについてAIとの英語でのやり取り(ディベートを含む)を行う機能

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●AIの活用による生徒の発話の質的向上～内容面、言語面ともに深まる言語活動を実施

- 話す内容の改善: 人との会話の前にAIと話すことで、話す内容をまとめたり、アイデアをふくらませることが可能(話す活動の後に続ける書く活動の質も向上)
- 話す英文の改善: AIが英文を文法的に修正してくれることで、正しい英文を用いて言語活動(ペアワーク等)に取り組むことが可能
- 話すハードル↓: AIとの対話を行ってから、実際に人と行うことで精神的な負担が減り、自信を持って話すことができる。英語で話すモチベーション向上につながる。



ペア・グループワーク等の言語活動の課題であった個に応じた「話すこと」の指導を、AIの活用により効果的に実施することができるようになった。特に、言語面の個別指導で効果が高いことから、教師は内容面の指導や言語面の全体指導(生徒に共通するの誤り等を全体へフィードバック等)に意識を向けやすくなっている。「書くこと」においても同様で、AIの活用により個に応じた指導が充実した。現在、課題は教師の指導とAI活用のベストミックスをどのように行っていくかにシフトしてきている。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①児童生徒の英語力の変化

CEFR B1レベルの生徒の数が伸び、全体的に「話すこと」の力が大きく向上、「書くこと」については上位層で伸びが見られる。

★「話すこと」B1以上
(7月)86人→(12月)281人

②児童生徒の関心・意欲の変化

AIを活用することによる即時的なフィードバックと言語活動への精神的ハードルの低下により、英語学習や言語活動へのモチベーションが向上。

★(意識調査)AI活用により技能が向上
→「話すこと」「書くこと」とともに7割以上

③教師の指導の変化

AI英語活用リーダーの情報発信により、AI活用による言語活動の質向上に対する教師の関心が高まった。リーダーはAIの分析を自らの指導改善に活用→ベストミックス研究が着実に前進。

★単元ゴールを意識してAI利用計画
(事前)3人→(事後)7人

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●AI活用の具体的取組の発信

【AI英語活用リーダー情報交換会】取組開始前(7月)と活用が進んだ2学期後半(11月)の2回にわたり実施した。1回目では各学校でのAI活用によって解決したい課題共有を中心に、2回目ではAIの活用事例についての情報交換をテーマとして実施した。2回目は、モデル校以外の教員も参加可能とし、AIの効果的活用の普及の一助とした。

【取組報告会での活用事例発表】AI英語活用リーダーは各モデル校で公開研究授業を行い、授業におけるAIの活用方法の一例を公開するほか、年間を通じて取り組んだ具体的な事例について報告会で共有する。県内全県立高等学校からの悉皆研修とした。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●授業での言語活動の質の向上 ⇒ AIの活用と人間(教師による指導)のバランスを考えた授業デザインによる、さらなる言語活動の質の向上

生成AIを搭載したアプリを活用することで個に応じた言語活動の指導が可能となり、授業での言語活動の質が向上してきている一方で、AIによる指導に依存してしまい、生徒の言語活動における内容面や言語面の見取りが十分にできていないケースが散見される。AIによる個別指導の効果がよりあがるように、教師が生徒の現状を見取り、内容面や生徒に共通する言語面の間違いなどを指摘する等、教師の見取りを活かした指導により、AIによる個別指導の充実度が高まることを意識していく必要がある。